

中京地区周辺における

幼稚園の歩みと展望

神 沢 良 輔



一、はじめに

美しく澄みきった空気、緑の木立ちの中の園舎、太陽の光を燦然と受けた運動場、山あり、川あり、谷ありの起伏にとんだ地形、その中で元氣よく遊んでいる幼児たち、希望すれば無償で誰でもすぐに入れる幼稚園、こんな幼稚園で、のびのびと楽しく幼児たちと遊んでみたいということは、幼児教育にたずさわるものの夢であり希望でもある。

けれども、現実には、このような幼稚園は皆無であるばかりでなく、運動場など、ほとんどない、狭い園舎の中に、多くの幼児たちが、少しの面積を上手に利用してあそんでいる状態をよくみかけるのである。でも入園できるのはよい方で、新しく住宅の開発

された地域や農村地域などにおいては、幼稚園が都市部に偏在しているため、入る幼稚園がなかったり、園の絶対数が少ないため、入園期には長蛇の列をつくるというようなところも多い。

このように、幼稚園教育は、現実に幾多の問題を残しながらも、幼児の幸せのために、常に前進していることは確かである。

そこで、現実の地点に立って、幼稚園教育を考えながら、さらにここまで発展してきた幼稚園教育の歴史をふりかえりつつ、今後の発展をみていくことは、誠に意義の深いことといわねばならぬ。

さて、これから、中京地区周辺における幼稚園教育の過去と現状、今後の問題点について述べねばならぬわけであるが、筆者の努力の不足と、不勉強のため、筆者が直接関係している、公立幼稚園のを中心にし、また述べる地域も、名古屋市、四日市市

などの歩みに限定せざるを得なかったことについておゆるしをいただきたい。

二、幼稚園の歩み

(1) 幼稚園の設立（明治時代）

東京、関西などと比較すると、産業の発展にもなつて発生してくる新興ブルジョアジーや、貴族などの上流階層の少なかつた中京地区においては、幼稚園の開設は幾分おくれられているようである。即ち、名古屋市においては、明治二五年三月に、愛知県師範学校長・中川郊次郎らを發起人として、神野金之助所有、中区南久屋町八八番戸（現在は東区久屋町一の四）の建物をもって、名古屋幼稚園が開設されている。この幼稚園は、明治三二年に名古屋市に寄付され、現在の名古屋市立第一幼稚園（大正二年より）となった。一方三重県においては、県庁の所在地である津に、宗教関係の人々の努力によって、入徳、ヤコブの二園が明治二六年に創立された。

公立幼稚園としては、貿易港をもち、工業化による新興の意気さかなな四日市が、中京地区のトップをきつて、明治二八年一月に、四日市町立四日市幼稚園（明治三〇年に市制がしかれ市立となる）が、新丁（現在は元町一〇の四）の不動寺を借用して、

三才以上の園児を収容して保育をはじめた。

このようにして、幼稚園教育の基礎は次第に確立していった。その後三重県においては、四日市を除き、市や大きな町に、宗教団体の設立した幼稚園（主として寺院の設立）が、一園ずつ設立されていったことからみると——（といっても全部で六園であるが）——当時は義務教育が国の力で前進していったのとは反対に、幼児教育の基礎は、住民の意志をくみとつた民間の力によって形成していったものといえよう。この傾向は、愛知県においても同様であろう。

そして、この傾向を、修了児数の増加でみていくと、第一表のようになり、次第にその数が増加している。しかし、明治時代には、次第に発展はしているが、急激な増加が認められないということは、前述のように、それが、一部のどちらかといえば、上層階級の人々の要求を満足させるために設立されたということにもよろう。それは、大正四年に設立された、名古屋市立第三幼稚園においてすら、附添室に、保育室の二倍以上の面積をさいていることから、うかがい知られる。

また、四日市幼稚園においても、各年度幼児の入園者が一定せず揃わないの

	名古屋市立幼稚園	四日市市立幼稚園	名古屋市立幼稚園
明治	30	—	60
	34	29	73
	40	73	88
大正	2	69	119
	6	84	120

（注）一印は不明

で、めぼしい家庭を選んで園の職員が訪問し、入園を勧誘してまわったそうであり、幼稚園を休んだ幼児たちの各家庭へは、当日の製作物やおやつなどを使丁が、いちいちとどけにいったそうである。

このような状況であるから、保育の内容も、静的なものが多く、室内で、フレーベルの恩物を中心にして、手技・遊戯・唱歌・談話などがなされていたようである。

なお、ここで参考までに、名古屋市立第一幼稚園創立七〇周年記念誌（昭和三七年）「園生」に、当時の保姆、服部（遠藤）志づがよせている文の中から、一部を引用してみよう。

今から七十年前第一師範学校の幼稚科が廃され、母校名古屋市立高女（後の市立第一高女）の附属となりまして、私は学窓をでると間もなく、明治三十四年二月保姆を拝命しました。「幼稚園は、教えるだけではなく、楽しく遊ばせつつ、しつける所である」という先生のおことばをモットーとして、髪は桃割、長そでにはじめてはかまをつけ、南久屋町の神野氏の邸の園舎にでかけました。豊敷の保育室、運動場は庭園で園児の服装もほとんど和服で、当時としては痛ようを感じませんでしたものの、今から考えますと、よくもあんな活動のできぬ不自然な風をしたものと思われます。四月からしばらくの間、園町小学校の教室と運動場の隅を借り保育しましたが、九月になりますと、新園舎も落成（現在の所）ようやく幼稚園らしく、園児も当時としては整備された砂場、ブランコ、シーソー遊動円木等にて、喜々として、号令がなければ各人の部屋でお話や手技

等、思うまま遊ばせることができました。（中略）毎朝、会集の時「いつも楽しい幼稚園、みんな仲よく遊びましょう」と歌ったむじゃきなおもかげがつきつきとまぶたに浮んで参ります。（以下略）

(2) 幼稚園の増加と教育内容の充実（大正・昭和初期）

さて、大正期に入ると、第一次世界大戦の結果の好況は、新たな市民階層をうみ、いわゆる大正デモクラシーの誕生となり、こどもたちの人格を認め、その権利を守るといふ運動になるとともに、幼稚園の新設ということが、さかんにおこなわれるようになった。

即ち、名古屋市の公立幼稚園においては、大正二年に市立第二幼稚園が、名古屋市のウォール街といわれる中区伊勢町に（戦後は千種区に移転）、市立第三幼稚園が、同四年に、中区伏見町に（戦後は西区志摩町）誕生した。これらの幼稚園は、いずれも市の商業の中心部栄町の近くに設立された。また、四日市市においても、同八年に市立第七尋常小学校に、第七小附設幼稚園を、一二年には、第三小附設幼稚園が、当時の市の中心部に開設された、このような傾向は次第に拡大し、三重県においては、昭和八年に、公立二園、私立二園を数えるようになり、教員数も七〇名をこえるようになった。

このような幼稚園数の増加は、そこで教育にあたる保母たちの、教育の交流ということをかんにさせるといふことになり、大正七年には、名古屋市保育会が公立幼稚園一〇数園の関係者で組織され、さらにこの会は、この面での先輩にあたる関西の三市連合保育会（のちの関西連合保育会）に古備保育会とともに、大正一〇年に参加している。

また、四日市においても、大正一二年に四日市保育会が結成され、月一回程度、輪番制の研究会をもち、実際保育を公開して研修していた。さらに昭和四年、四日市幼稚園保母の水谷三の主張により、三重県保育会が結成され、第一回の会合が四日市幼稚園にて開催された。この会は、年一回程度の協議会をもつたようである。

では、ここに、三重県保育会規約の一部と、昭和八年九月十七日に四日市幼稚園でおこなわれた、第五回の事項書の中から、提出問題の一部を示してみると、第二表、第三表のようである。これらの資料から、当時の三重県の保育界の実情の一部を知ることができよう。

このような保育会は、いずれも、大正時代の自由主義的教育や、東京女子高等師範学校附属幼稚園における、倉橋惣三の新しい保育の実践の影響を多分に受けて成長していった。

名古屋市立第二幼稚園における、大正一〇年ごろの思い出につ

第二表 三重県保育会規約

第一条	本会ハ県下公私立幼稚園及ビ保育団体相互ノ連絡ヲ保チ、保育上ノ研究改善進歩ヲ期シ、併セテ會員ノ親睦ヲ図ルヲ以テ目的トス
第二条	本会ハ三重県保育会ト称シ県下公私立幼稚園及ビ保育団体ノ職員ヲ以テ組織ス
第三条	本会ハ毎年一回各地交番ニ保育協議会ヲ開ク（但シ臨時開会スルコトアルベシ）
第四条	会議ニ関スル役員ハ当番地ニ之当タルモノトス
第五条	協議会提出問題ハ説明ヲ附シテ開会二十日以前ニ当番幼稚園ニ送付スルモノトス（但シ問題ハ各幼稚園一題トス）
第六条	協議会当日ハ当番地保育ノ實際ヲ參觀スルモノトス（以下略）

第三表 提出問題

一 協議題	一、近時盛大トナレル託児所経営ノ実状ニ鑑ミ幼稚園経営上更改スベキ点	津市新野幼稚園 四日市幼稚園
二 談話題	一、個性調査ノ結果ヲ如何ニ實際保育ノ上ニ活用セラルルカ其ノ實際ヲ承リタシ	神戸幼稚園 桑名南幼稚園
	二、近時特ニ留意セラルル養護施設承リタシ	尾鷲幼稚園
	三、園児養護上ノ施設並ニ状況承リタシ	
	四、幼児ノ絵ノ導キ方如何	
	説明 1 絵ヲ描ク事ニ対シテ興味ヲ持タナイ幼児	
	2 全ク描コウトシナイ子	
	3 常ニ同一ノ物ノミ描イテイテ進歩性ノナキ子	
五、夏期幼稚園ノ保育實際ニ付承リタシ	説明 1 幼児ノ保健衛生上ヨリ見タル夏期ノ始鈴及ビ帰宅時間ニツイテ	
	2 夏期保育ニ関シテ特ニ設備スベキ事項及ビ遊具ニツイテ	中部保育会
六、幼児身体検査ノ結果ヲ比較的有効ナラシムル良法承リタシ		（以下略）

いて、当時の同園の保母長であった市川たまは、第二幼稚園創立五〇年記念誌（昭和三九年）、『ふたばはのびる』の中で、つぎのようにのべている。

（前略）原始文化に特に興味を持つ私、幼児の発達段階が原始人進化の道程に相似したものであることに思いついたり、清水の舞台からの心境で第二幼稚園保母長というポストに飛び込んだ。もとより無知で何等の研究もせず、経験といえば高師卒業前附属幼稚園の僅かな実習だけ。もちろん何の成算企画があった訳ではない。子ども好きの自分はただ白紙で毎日可愛らしい幼児の生活を見守りその中から行くべき道を発見しようと思つた。子どもとよく遊び、お茶の水の講習にも出席して手技も稽古し、お遊戯も習つた。

お茶の水の倉橋主事からは「既成の何物にも捉えられず自由に自己の構想を実現なさい。あたりの人も決して干渉するな」と言われ、なんとなく希望の曙光を見出し、あれやこれやとやつきになって独り勉強し、思索し、構想を練つた。しかし、場所が名古屋の経済界の中心なる取引所あり、軒を並べた株屋町の一隅にあった関係上、他に見られない特殊性のある幼稚園であつた。（中略）

過去を忘却し、戦災によって文献書類はメモまで焼失し何一つ残っていない。今、心の片隅に残っていることは、教育とマツチしないような切れ切れの断片のみ。

1 県庁近くから女中をつれて通われた上品な奥様の孫息子は、一寸した隙に門から出て、塀の向こうの駄菓子屋からあれこれ欲しい物を持ち帰り、店から時々文句を言われた。その当時は総じて家庭でお金を持たずにつけて買っていったの

で。

2 保母の方は非常に絵が上手で、各部屋の黒板には競って季節の花鳥静物が色彩美しく描かれている。手技も巧妙を極め、遊戯も熟練されているが、今にして思えば獨創性に乏しく、従つて、幼児の指導も模倣に限られ、心理的な研究とか幼児の観察も表面的で科学的探究が少ないので深さを持たないものであつた。

戦災で焼失して二〇年、千種に更生して新しい園長が真摯な態度で時代に即した幼児教育をされ、如何に発展しつつあるかと思う時、隔世の感がすると同時に嬉しさが胸にせまる。

また、名古屋市立第三幼稚園においては、東京女高師において、直接倉橋惣三の指導を受けた木村（柴田）りんが、大正一〇年に就任し、幼稚園令公布の直後の大正一五年、初代の専任園長になるや、今まで静的であつた保育のあり方に、新しく、生活を通しての自由保育をとり入れ、率先して、公立幼稚園最初の公開保育を実施した。木村りんは昭和五年に退職しているが、自分の在職期間の思い出を、第三幼稚園、創立五〇周年記念誌（昭和三九年）『あゆみ』に寄稿しているので、その中から、一部を参考までに転載してみる。

『私は大正一〇年一〇月一日附を以て赴任した。（中略）在職一〇年間、保育の改善に努力した主な事項を項目にして簡単に述べましょう。

一、設備については、まず、廊下側の窓を下げる大修繕を断行

した。

二、分団保育実施、まだ実施していなかったので、一組ずつ指導した。

三、新しく課した遊び、大工遊びは年長児の男児に課し、園長自らこれに当った。また、相撲遊び、高跳び遊びも加えてみた。

四、動物飼育に力をそそいだ。まず、ひとつがいの鳩の放ち飼いを試みたところ、さいわい大屋根に巣を作ったので、東京森村幼稚園参観の節、みてきた六角の大きな巣箱が三〇個もついたものを早速造った。それに鳩がいっぱい入った時は盛観でした。

五、郊外保育は、特に春秋に週一回は試みた。各自の作った風や風車など手に手にもって遊んだのは面白い試みと思った。

六、人形芝居、園内運動会、デパート遊び、銀行遊びなどは市内の幼稚園では実施していない頃であったので面白かった。

(中略)

また会集は週二回全幼児の為にし、四回は年長で分けておこなった(以下略)

このようにして、保育は、静的なものから動的なものへ、室内を中心とするものから戸外の保育へ、そして観察やリトミックなどがとり入れられ、幼児の側に立った保育、幼児の生活そのものを豊かにする保育へと展開されていった。

なお、さらに前述の保育の実例として、東京女高師附属幼稚園で開かれた講習会に何度も出席し、いつしか倉橋惣三の考え方

に共鳴するようになった四日市幼稚園保姆、小谷(福村)きみが、『幼児の教育』誌(本誌)第三千四卷第一号(昭和八年)に寄稿した、『私の町を中心として』——(誘導保育の一案)——の保育実践の一部を再び掲載することにより、当時の保育の実際をうかがってみたい。なお、小谷きみは、昭和四年に四日市幼稚園に赴任し、昭和二年県下初の専任園長として四日市幼稚園の園長となり昭和二八年同園を退職している。

「汽車遊びのため」と思って、以前銀行ごっこに使った丸窓のお家を出したところ、忽ちそれが切符売場になりました。恒幸さんはすぐ「先生切符作るのに此箱のふた頂戴」といって来ます。僕にもと、次から次へ厚紙は切符になります。先生鉛筆、鉛筆といって鉛筆が持ち出され、早速駅名が書き込まれました。其駅名を調べてみますと、あやしげな字なりに、ナラ、オオサカ、ナゴヤ、ヨッカイチ、トキヨ(東京)、モジ、シモノセキ、サガ、などが出来ています。此他幼児の駅名に、ウノモリ、シンチョ、ナカマチ、など出来ています。

すぐ隣の室が遊戯室であるのを幸いに利用して、汽車道が出来るしました。ヒル氏積木をレールとして、遊戯場一ぱい螺旋状に線路がしかれました。

切符売場で、切符を買った者は、遊戯場の入口で鉄を入れてもらって、ブリッジを渡って汽車に乗るのです。ブリッジに室内すべり台を使ったところは階段を上るところから考えたのでしょう。そこを下りるとすぐ汽車道がついています。幼児自らは、汽車兼乗客なので、一生懸命にシュシュいって歩きます。

駅長さん、車掌さん、レールを直す者、切符を売る者、改札する者、出口掛かりとそれぞれ役に付きます。そのうち車掌さんの声らしく、ハッタ、ハッタ、次は皆さんのりかえてあります。ピリピリと共に手を上げると又動き、ナゴヤ、ナゴヤと呼ぶ声について、スシ、ベントウ、サンドウイッチとなかなか呼び声もうまく、一回りしては下りて、又切符を買って乗り始めます。

このように面白そうに遊んでいるグループもあれば、又お家作りに余念ないグループもございます。朝お顔をみるなり、先生お窓切らして、先生お菓子作る、セロハンがもうありませんといっただけです。

一団は汽車遊びに、一団はお客作りにお菓子作り、又一団はおさかな遊びと、皆の興味は、はちきれぬばかりです。各自は思い思いに自分の遊びに熱心なもので、そばでどんなに騒々しくても見向きもせず、自己のなさんとする仕事に一生懸命であることは、私共のいつも感じさせられることです。

かくして私の町を中心としての遊びは、今暫く続くことでしょう。お店が出来れば、市中を自動車がかけてまわって、又一しきり遊べる事と思います。(以下略)

また、前述のように、大正一五年四月に公布された、幼稚園令は、幼稚園教育の発展にいろいろの影響を与えたらしく、名古屋市内においては、同年、第一、第二、第三幼稚園に専任の園長を置いており、三重県においても、この前後に、幼稚園の数が増加している。四日市においては、富田町に町立富田幼稚園が昭和二年新設され、名古屋市内においても、昭和六年に市立中ノ町幼稚園が

新設された。そして、名古屋市立第三幼稚園においては、昭和九年、偏食矯正の目的をもって、完全給食の実施を、当時の園長、大島せきの努力によってしている。

つぎに、保母の需給については、専門の養成機関がすくなく、ために、幼稚園の数が次第に増加しはじめた、大正中期から昭和初期にかけては、東京、奈良の女高師や女子師範の卒業生が、遠くこの地に単身赴任しているようである。これらの人々は、その地方の幼稚園教育のため、大いに力を尽くしたようであるが、筆者の手もとにある資料では、それらの人々の氏名をはっきりうかがい知ることができないのは、誠に残念である。

(3) 幼稚園教育の大衆化と第二次世界大戦

(昭和一〇年—昭和二〇年)

前述のような、昭和初期の幼稚園数の増加と教育内容の充実は、昭和十年代に入って、徐々ではあるが一般化していった。それにつれて、幼稚園への入園者も、上層階層の子弟から、次第に、中層階層の子弟へとその層を拡大していった。幼稚園の数も、入園者の数も、昭和初期に比して二倍近くになり、幼児教育の必要性も、一般大衆に次第に理解されつつあった。

しかし、このような時期に、不幸にして我が国は、昭和一二年には日華事変、昭和一六年には太平洋戦争に入り、せっかく充実しかけてきた幼稚園教育も、この時期をさかいにして、その発展

は逆もどりの形となってきた。

そして昭和一八年には戦時体制下に入り、名古屋の市立幼稚園には、附設保育所がもうけられ、どうやら園名のみを残すことだけはまぬがれたようである。四日市市においても同様であり、附設保育所はもうけなかったが、一九年ごろには、幼稚園は保育所化し、勤労家庭の幼児の保護を第一義としたので、園児数は激増した。かくして昭和二〇年にはあいつぐ空襲により、名古屋市、四日市市における幼稚園の大部分は焼失し、やむなく休園することになった。

(4) 幼稚園教育の再興とその後の発展（戦後のあゆみ）

さて、このようにして終戦を迎えたわけであるが、昭和二一年になると、疎開していた幼児も次第に帰り始めたので、それぞれ園においては、早速仮住居ではあったが、それらの幼児を集めて保育を再開した。しかし、大部分の幼稚園では、そのときわずか、二、三〇名の幼児を取容するにすぎなかった。

このようなとき、昭和二二年に公布された学校教育法によつて、幼稚園は就学前教育機関として、学校体系の中に位置されたが、各地方の自治体は、戦災による復興に忙殺され、実際には幼稚園まで手がまわらないという現状であった。

そしてさらに敗戦による貧困から、幼稚園の復旧というよりはむしろ、児童福祉法による保育所づくりという形で、幼児教育の

ない手を変えられていった。

即ち、四日市市においては、第三小、第七小学校に附設されていた幼稚園は、昭和二四年に、それぞれ保育所として新設され、それ以後、保育所は次第に増加の傾向をたどり、幼稚園に代つて保育所の時代が到来していると世評されるほどであった。しかし、このような情勢の中でも、世の中のおちつきをとりもどってきた昭和二五年ごろより、戦後の幼児の急増ともあいまって、幼稚園に対する要求も次第にたかまり、既設の園に対する希望者が急増するとともに、私立幼稚園を中心として、次第に幼稚園の数は増加の傾向をたどり始めてきた。また、昭和二七年に教育委員会が発足し、また、義務教育学校の整備のたいのめやすのついた昭和三〇年ごろ、町村合併などの影響もうけて、公立幼稚園が新設されはじめた。

終戦後三五年頃までに新設された公立幼稚園は、名古屋市において一〇園、四日市市において一一園となっている。また、三重県においては、各都市に、四日市市と同様に多くの公立園が設立され、五才児は希望する公立幼稚園への入園がほぼ可能になっている。

そこで、手もとにある資料から、最近の幼稚園の修了者の小学校への入学率の一覧を、愛知、岐阜、三重についてみると、第四表のようになる。

第4表 幼稚園修了者の小学校への入学率

年度 県名	37		39		40	
	人員	%	人員	%	人員	%
愛知	21,193	32.22	23,049	34.42	25,473	38.84
岐阜	4,737	17.02	5,640	21.30	6,901	24.15
三重	10,292	42.30	10,980	47.80	12,500	50.68
全 国		33.0		38.9		41.3

さて、前述のように、昭和三〇年前後をさかいとして、幼稚園教育は、その数において、また量において飛躍的な発展をしてきた。では、つきに教育の内容はどのようなになったかについてみていこう。

昭和二一年、幼稚園の再開をする間もなく、名古屋市の幼稚園では、名古屋市保育会を再開し（集まったのは公私あわせて一四園）これからの幼児教育の拡充のために教職員の研修にとりかかったが、その当時では、何から手をつけていいかわからず、具体的な研修計画をたてるというより、みんなでこれらの幼児教育のため、お互いにはげましあうということが話し合いの中心になったような状態であったし、三重県でも、三重保育会はついに再開されず、保育所

をも含めた三重保育連盟を組織し、ほそぼそと研修にあたっていた状況であった。

しかし、昭和二二年、三重県最初の公立幼稚園の専任園長として、福村（小谷）きみが、四日市幼稚園長に任命され、平操子が松阪幼稚園の園長に任命されたころより、これらの人々を中心に、昭和二四年に、私立幼稚園をも含めて、三重県幼稚園協会を設立し、ここに県下の幼稚園教育の研修の推進力の母体が形成されていった。

これらの会は、それ以後、それぞれの地方における幼稚園教育の向上のために、多大の貢献をしはじめた。また、これらの会を地盤にして、敗戦後の傷もいちはじめた昭和二五年ごろより、県を越えての研究組織へと発展していった。

即ち、これらの中で、中京地区から全国組織へ発展したのもとして、『全国幼稚園施設協議会』がある。この会は、名古屋市立第三幼稚園長、浅野寿美子らの提唱により、昭和二七年、同園において、第一回の結成研究大会をもって、幼稚園の施設、設備の拡充・改善について指導的役割を果している。また、同年には、東海地区幼稚園教育研究協議会が発足し、愛知・岐阜・三重・静岡県などを中心として、毎年一回の研究協議会が開かれることになった。

このような会が結成されたことは、各地区における教職員の研

修や研究を刺激するとともに、各地区における実践も向上してきたことを示すことにもなり、昭和三〇年ごろになると、一応戦前の水準まで、幼稚園教育も充実してきたことになるのではなからうか。

三 今後の課題と展望

さて、これまで中京地区における幼稚園教育の発展のあとを、非常に狭い範囲ではあるが、きわめて簡単にいかけてみた。

しかし、これらのことからでも、幼児教育の発展のために、先輩の方々が非常に苦心をはらってきたことがよくわがわかれる。過去の幼稚園の歴史のために大切な紙面をたくさん使ったのは、これらの先輩の方々の苦勞を無にしたくなかったこともあるが、その間に、今日の幼稚園教育にとっての、きわめて大切な基礎づくりが、教育の構え方や内容の面をも含めてできていたということを示したかったからでもある。だから、これらの基礎の上にとって将来の展望をしてみることが、もっとも大切なことになるのではなからうか。

もちろん、この間に、社会の幼稚園教育に対する認識の変化、経済的生活の変化など、いろいろの条件が作用して発展の方向をたどっているというこはいうまでもない。

でも、幼稚園教育の発展を一がい喜んでばかりはおれない。そこには、今後に多くの問題を残している。以下、それらについて簡単に述べてみよう。

(1) 幼稚園に対する一般の認識が高まったといっても、それは必ずしも正しい方向に進んでいるとはいえない。即ち、教育年令の低下と、教育の早期開始は、先進的諸国の傾向であるにしても、それはややもすれば、教育内容における知的な教育内容の早期開始ということにすりかえられているという現実によくぶつかるところである。とくにそのような傾向は父兄に多く、ためにそれが幼稚園へもちこまれてくるということになるのかもしれないが、知的な内容を早期に開始することにより、小学校での負担がいくらかでも軽減され、またそのことにより、小学校での学習がより容易にされるだろうという考え方や、小学校での成績の競争でより優位にたてるだろうという、個人競争のために、スタート・ラインからハンディキャップをつくらうという考え方につながっている。そのために、いろいろの面で発達の不調和な幼児ができてきている。

だから、教育の早期開始の本当の意味を、幼稚園の発展の歴史の中で学ぶとともに、その本質に対してよく認識させる必要がある。もちろん、教育に直接あたる教師自身もよく理解しておく必要があろう。これは、幼児教育の拡大にともなって、正しい幼児

教育が行なわれるために、今こそ再確認しておくことがぜひとも必要なことである。

(2) 正しい幼児教育をするためには、やはり、すべての幼児が、幼児教育機関に自由にはいれる必要がある。しかし、現在、公立幼稚園の場合は、地方の市町村の財政と、市町村の理事者の理解度に依存しなければならぬということから、幼稚園の配置は、市町村を単位として非常に偏在している。これらの市町村による格差はぜひ是正されなければならない。すくなくとも昭和三八年七月に文部省が発表した、幼稚園教育振興計画案の内容ぐらゐは早期に実現される必要がある。

(3) といつても、幼稚園が増設されるだけでは、幼稚園教育の内容は充実もしないし進歩もしない。やはり、幼児教育を十分に行うための環境の充実、教師の質的向上がどうしても必要である。この点については、多くの問題を残していよう。

(4) さて、これらの問題は中京地区に限定された問題ではないかも知れないが、前述のように、幼稚園が、現状では、市町村の財政に依存しているところが多いということは、やはり、幼稚園の発展を考えると、それぞれの市町村における幼稚園の発展の歴史ということを無視することはできない。だから、それらの特殊性の上になつて、一般的に発展の見透しを立ててこそ、正しい幼稚園教育の発展がみられるのではないかと思う。

(5) そして、幼稚園教育の新しい展望は、前述のことの基礎の上にたつて、幼稚園の教育にたずさわる人々、幼児をもつ人々、そしてそれらをとりにまく社会の人々などが、それぞれの時点でもに考えていかなければならないことであろうし、そのようなことのできる組織づくりを早急に進める必要があろう。

(6) さらに、これまでみてきた幼児教育の発展の歴史は、これらの幼児教育の正しい発展のすがたを願っている。だからそのために、現実にあるいろいろの障害は、幼児の幸せのために、みんなの力でとり除いていかななくてはならないだろう。

最後に、この小論をまとめるにあたって、多くの方々に御協力、御指導を仰いだ。

このことについて、この紙面をかりて御礼申上げるとともに、とくに貴重な資料を提供していただいた、

名古屋市立第一幼稚園長 伊藤婦美子

同 第二幼稚園長 山本 正

同 第三幼稚園長 浅野寿美子

元四日市市立四日市幼稚園長 福村 きみ

三重県国公立幼稚園協会会長 佐々木かよ

の諸先生方に対して心から感謝の意を表したい。

(四日市幼稚園)